



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ほめ返答の位置に現れるユーモア：会話分析の手法とフェイスの視点から
Author(s)	趙, 文騰; ZHAO, Wenteng
Citation	国際広報メディア・観光ジャーナル, 38, 3-17
Issue Date	2024-04-16
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91795
Type	departmental bulletin paper
File Information	Jimcts_38 (1).pdf



ほめ返答の位置に現れるユーモア —会話分析の手法とフェイスの視点から

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士課程

趙 文騰

The Humor Appearing in the Position of the Compliment Response —Using the Methodology of Conversation Analysis and the Concept of Face

ZHAO Wenteng

abstract

This paper focuses on the humor that appears where the compliment response was expected, using the methodology of conversation analysis and the concept of face. The analysis revealed that humor that appears in the position of a compliment response can function as a compliment response, and the humor is based on common knowledge among the conversation participants. Furthermore, it was found that by performing such humor, the recipient can deny the compliment jokingly and impliedly, avoiding self-praise caused by accepting the compliment and showing consideration for the positive face of the speaker. In other words, the humor that appears in the position of the compliment response is thought to also accomplish the act of coping with “the dilemma of the recipient.”

1 ほめ返答の位置に現れるユーモア

日常会話では、ダジャレ、冗談、ボケとツッコミ等、ユーモアは特定の行為として様々な形式で現れている。また、単独で現れるだけではなく、他の言語行為と結びついた形でのユーモアもよくある。例えば、下記の(1)では、ほめられた後、ほめ返答の生起が期待される位置でユーモアが観察されている。具体的には、Gによるほめという隣接ペアの第一成分¹ (01、02行目)が発された後、ほめ返答という隣接ペアの第二成分が期待される位置で、ほめられ側であるWは冗談めかしながら、「目の見えない猫が死んだネズミに出会う」というまぐれ当たりであることを意味することわざを発している(03行目)。

(1) 【スぺアリブ】筆者収録²

- 01 G: 哇, 好吃 哎, 这个 糖醋排骨, 厉害 呀,
ITJ おいしい ITJ この スぺアリブの甘酢あんかけ すごい ITJ
- 02 小XXX.
Wちゃん
(うわ,おいしいね,このスぺアリブの甘酢あんかけ,すごいね,Wちゃん.)
(Wに視線を向けながら発話している))
- 03 W: 瞎猫 碰上¥ 死 耗子¥.hhh
目の見えない猫 ぶつかる 死んだ ネズミ
(目の見えない猫が死んだネズミに出会う.)
(スぺアリブに視線を向けてからGに視線を向ける))

本稿では、ほめ返答という特定の位置に現れたユーモアに注目し、会話分析の手法とフェイスの概念を用いて、このようなユーモアがどのように実現されているのか、このようなユーモアがどのような相互行為上の機能を果たしているのかについて分析する。

2 先行研究

本節では、まず本稿で取り扱うほめとユーモアの定義を提示する(2.1節)。次に、ほめられた後、ほめられ側が直面する「ほめられ側のジレンマ」について説明した上で、会話分析の手法を用いたほめ返答に関する研究をまとめる(2.2節)。最後に、本研究の位置付けについて述べる(2.3節)。

▶1 会話分析では、「質問-返答」や「ほめ-ほめ返答」のような2つの発話が行う行為のカップリングによる連鎖を「隣接ペア」(adjacency pair) (Schegloff & Sacks, 1973; Schegloff, 2007: 13-21)と呼ぶ。「質問」や「ほめ」のような1つ目の発話は第一成分 (First Pair Part)、「返答」や「ほめ返答」のような第一成分に隣接した、しかも、第一成分との組み合わせは適合である発話は第二成分 (Second Pair Part) という (Schegloff & Sacks, 1973; Schegloff, 2007: 13-21)。

▶2 (1) については3節で(5)として詳細に分析する。

2.1 ほめ、ユーモアとは

ほめに関する研究の中で、ほめの定義を行ったものとしてHolmes (1988)、小玉 (1996)、金 (2012)、趙 (2023) 等が挙げられる。本稿では、これらの定義を参考にして趙 (2023) の定義を採用し、ほめを以下のように定義する。

ほめとは、話し手が聞き手あるいは聞き手に関わりのある人、もの、ことに関して“良い”と認める様々なものに対して、聞き手を心地よくさせようとすることを前提に、明示的あるいは暗示的に、肯定的な評価を与える言語行為である。

次に、本稿で扱うユーモアとは何かを説明する。平本 (2011) によれば、ユーモアはある概念と事象との間の不一致から生じる「ズレ」により生まれる (平本, 2011: 148)。また、Berger (1976) は言語学の視点からユーモアを以下のように定義している。

humor establishes incongruous relationships (meaning) and presents them to us with a suddenness (timing) that leads us to laugh.

(Berger, 1976: 113)

(ユーモアは、矛盾した関係 (意味) を構築し、そして、それを急に (タイミング) 私たちに提示し、笑いを引き起こす (筆者訳))

本稿では、上記の定義を参考にし、ユーモアを「通常概念との間にある「ズレ」が生じる、笑いを引き起こす行為」と定義する。

2.2 会話分析の手法を用いたほめ返答に関する研究

本節ではまず、ほめられた後、ほめられ側が直面する「ほめられ側のジレンマ」について説明した上で、会話分析の手法を用いて「ほめられ側のジレンマ」という観点からほめ返答について考察した研究を紹介する。

上記のほめの定義が示すように、ほめ行動は相手に肯定的な評価を与える行為であるため、ほめられ側のよく思われたい、認められたいという欲求、すなわち、ポジティブ・フェイス (positive face、以下はPFという) (Brown & Levinson, 1987) を満たすことができる。また、Pomerantz (1978) が指摘したように、ほめは評価という性質を持ち、ほめに対する同意・受け入れの返答はほめ側の考えへの同意となるため、ほめ側のPFを満たすことができる (古川, 2007)。しかし、ほめに同意することは、ほめられ側の自画自賛につながってしまい (Pomerantz, 1978)、ほめられ側のPFを脅かす恐れがある (Brown & Levinson, 1987)。一方、ほめを否定すると、ほめられ側の自画自賛が回避できるが、ほめ側の評価、すなわち、ほめ側の考えを否定することになり、ほめ側のPFを脅かす危険性を孕む。したがって、ほめられた後、ほめられ側

なお、谷畑（2020）は、ことわざの使用をほめ返答として扱っている。その事例として、谷畑（2020）では、下記の（2）を提示している。

01 F : わあ:,じゃあ.hあの:あれですね,
02 なんか特技が増えちゃうわね,[だんだん
03 M : [hhhhh
04 F : [hhhhh
05 M : [hhhいやまあ:,なんなん
06 下手のヨコズナですよhhhh

2.3 本稿の位置付け

▶4 しかし、谷畑 (2020) は、ほめられた後ことわざが使用される事例として (2) しか提示していない。そのため、本稿では、「ほめられ側のジレンマ」に対処可能なほめ返答戦略に関する先行研究として谷畑 (2020) を挙げているが、ことわざの使用をPomerantz (1978)、張 (2014) が指摘した3つの戦略と同様に、「ほめられ側のジレンマ」に対処可能な一般性のあるほめ返答戦略として扱わない。

以上を踏まえ、本稿では、このようなほめ返答の位置に現れたユーモアに注目し、日本語日常会話と中国語日常会話をデータとして、これまでのほめ返答に関する会話分析研究に基づき会話分析の手法とフェイスの概念を用いて、このようなユーモアがどのように実現されているのか、このようなユーモアがどのような行為を達成しているのかについて分析する。

本稿は、公開されている2つの会話コーパス及び筆者が収集した中国語日常会話をデータとして用いる。2つの会話コーパスはそれぞれ日本国立国語研究所による『日本語日常会話コーパス』（以下CEJCという）、米ペンシルバニア大学による『CallFriend』である。以上に加え、筆者が中国語母語話者の協力者自身に記録してもらった中国語日常会話における雑談場面の音声を用いる。上記のデータからほめ返答の位置に現れたユーモアの事例を取り上げ、串田（2006）のトランスクリプト記号を若干修正した上で、コーパスが公開されているトランスクリプトに基づきデータの書き起こしを行った。

3 ほめ返答の位置に現れる ユーモアの事例分析

本節では、ほめ返答の位置に現れるユーモアの事例を4つ提示して分析する。なお、事例中の印「→」はほめ発話、「➡」は本節の分析において注目する発話、ほめ返答の位置に現れるユーモアの発話を示す。まず、1つ目の事例として（3）を見る。

（3）【明るい服】CEJC_T011-007

- 01 Y：あたしもお財布今度ピンクにしようかな：なんて [思ってたんだよ。
02 S： [あ…
03 ほん[と…？
04 K： [もうさ、やっぱ、[小物はね。
05 Y： [コーラルピンクって[ゆう (0.3) うん (0.3) か…
06 K： [あ、あ、小物は明るい色はすん=
07 =のいいよね。だって普通の服はなかなか着れな[くねえ？
08 Y： [そうだね。
09 (0.3)
→10 Y： え？まだ着られるんじゃない[の？
（（Yは右手を開いて、手のひらを上に向け、指先をKのほうに向けて、視線をKのほうに向けながら発話している））
11 K： [＞いやいや<。
→12 S： 着[ら：れ：るよ…
（（Yのほうに視線を向けながら発話している））
➡13 K： [＞。パー子になっちゃう、パー[子に¥なっちゃう。¥<。
（（Sのほうに視線を向けながら発話している））

- 14 S: [hhhhh
15 Y: [hhh¥パー子¥.
16 K: [ためだよ.
17 Y: [hhhh。パー子。

この事例では、ママ友同士の3人が喫茶店で雑談している。これまでの会話で、3人はKの新たに買ったピンクのスマホケースについて話した。それに関連付けながら、01行目で、Yが「あたしもお財布今度ピンクにしよう」と自らの要望を伝え、3人の間に財布の色という新たな話題を開始する。それに対し、Kは「小物は明るい色はすんのいいよね」(06、07行目)とYの考えに同調する。その直後、間髪を入れずに続けて「だって」を前置きにし、「普通の服はなかなか着れな」と根拠になりうる発話を追加する。一方、この発話は主語がないデザインになっているため、主語が誰であるかによって、次の3つの解釈がありうる。1つ目は、3人は大体同じ年齢層であるため、3人ともなかなか明るい色の服は着られないという意を表しているという解釈である。2つ目は、Kは自らのことを言っており、自分はもう若くないから、なかなか明るい色の服を着られないと自己卑下しているという解釈である。3つ目は、KはYに視線を向けていることから、Yはもう若くないから、なかなか明るい色の服を着られないという解釈である。しかし、3つ目の解釈だと、Y(の年齢)に対するマイナス評価にもなってしまうが、07行目は遅延や言い淀みがないという優先的発話の特徴があることから、Kは3つ目の意味を伝えようとしていないことが読み取れる。07行目に対して、Yは08行目で「そうだね」と素早く受け入れる。Pomerantz (1984)によれば、自己卑下に対しては不同意の返答が優先性の高い返答である。08行目には、簡潔であり遅延がないという優先的返答の特徴があることから、Yは07行目をKの自己卑下として扱っていないことが分かる。以上から、KとYは07行目を上記の1つ目の解釈、すなわち3人全員を主語として発話を産出・理解していると言える。

この点は10行目のYの発話からも確認できる。08行目を発して0.3秒の間が空いた後、Yはすぐに「え？まだ着られるんじゃないの？」と上昇音調でKに確認する。ここではまず「まだ」の使用について考える。上述したように、3人はママ友であり、年齢的にはそんなに若くない。「まだ」という表現から、Yは、その年齢にも関わらず、まだまだ若く見えることから、明るい服を着られるという言外の意味を伝えようとしていることが読み取れる。さらに、10行目に伴い、Yは右手を開き指先をKのほうに向け、視線もKに向けているという非言語行動から、10行目はK宛ての発話であることが分かる。つまり、Yは一旦07行目を3人とも明るい服を着られないというふうに解釈したが、10行目で、Kを例外として扱い、Kはまだ明るい服を着られるとKに対する間接的なほめを行う。

続いて、Kは「いやいや」と明示的にそれを否定する。通常、相手が発した疑問に対しては肯定的な返答が優先的である。しかし、11行目は否定的な返答であるにもかかわらず先行発話に少しオーバーラップしており、遅延や言い淀みがないという優先的返答の特徴が見られる。このことから、Kは10

行目を単なる質問ではなく、自らへのほめでもあることを理解しており、自画自賛の回避を優先していることが分かる。

続いて、12行目で、Sは「着られよ」と音を長く伸ばし、Yに同調しながら、Kに対する間接的なほめを再度行う。つまり、12行目は10行目に続く2回目のほめである。さらに、12行目の語尾の「よ」の使用は、10行目における上昇音調での「じゃないの?」に比べると、発話者の主張と態度をより明示的に表していることから、12行目は10行目よりも強いほめであることが読み取れる。この時、ほめられ側のKは2回目の「ほめられ側のジレンマ」に直面している。しかも、Kはすでに1回目のほめ（10行目）を否定したため、もう一度ほめを否定すると、ほめ側のPFを脅かす危険性がさらに高くなる。つまり、この時点でKはより厳しい課題に直面しており、何からの対処を取る必要がある。

ここで、KはSのほうに視線を向けながら、「パー子になっちゃう」という発話を、笑いを含む口調ではやめに2回繰り返す（13行目）。「パー子」とは、派手なピンクの衣装でよく知られる日本のタレント、落語家の林家パー子であると考えられる。ほめられたという文脈を考えると、Kは「パー子」をリソースとして、明るい服を着ると、おかしくなる、滑稽なことになるという言外の意を伝えていることが分かる。さらに、物事が悪い方向へ行ってしまったというニュアンスが与えられた「なっちゃう」という表現の使用から、Kはピンクの服を着た時の自分のイメージは、本来の自分が望んだファッション効果から大きく外れたものとして示していることが読み取れる。このように、Kは「いやいや」「もう着られないよ」等のような表現を使わず、暗示的な否定を示す。

2.1節で述べたように、ユーモアはある概念と事象との間の不一致から生じる「ズレ」により生まれる（平本，2011：148）。この事例でいうと、ほめの後の位置で、「いやいや」「もう着られないよ」等のような「異常さ」（平本，2011）のないほめ返答が来ることが予測される。これは「概念」に相当する。それに対し、このような位置で、Kは「パー子になっちゃう」と、これまでの文脈と一見かわかりがたいように見える「パー子」に言及して返答する。これは「事象」となる。このように、通常のほめ返答（概念）と13行目のほめ返答（事象）の間に「ズレ」があり、そこからユーモアが醸し出される。また、Brown & Levinson（1987）が指摘したように、ユーモアは会話参加者の背景知識を前提としている。つまり、このユーモアの実現は、3人が持つ「パー子」に対する共通知識、つまり、「パー子」は人を笑わせる、滑稽な人であるという知識に基づいていると考えられる。

このユーモアは、ほめられた後、ほめ返答の産出が期待される位置に現れていることから、ほめ返答とみなしてよいと考えられる。12行目のほめに対して、上記のように、「いやいや」「もう着られないよ」等のようなほめをはっきりと否定する返答もありうる。では、Kはそれを使用せずあえてユーモアを発することで、どのような行為を達成しているのか。Kは冗談めかしながら明るい服はもう着られないことを伝えることで、暗示的にほめを否定することができる。その結果として、ほめを受け入れることにつながる自画自賛

を回避すると同時に、端的にほめを否定せずほめ側のPFに配慮することが可能になる。このことから、ほめ返答の位置に現れるこのユーモアは、「ほめられ側のジレンマ」に対処可能であることが分かる。

13行目を受けて、ほめ側であるSとYは笑ったり（14、15、17行目）、「パー子」という具体的な面白みを繰り返したり（15、17行目）する。Sacks（1974）、Norrick（1993）によると、ユーモアに対して、笑いの返答や具体的な面白みの繰り返しは、ユーモアへの理解を示すことができる。このことから、ほめ側であるSとYは13行目のユーモアを理解していることが分かる。続いて、Kは16行目で「だめだよ」を発する。この発話から、Kは10行目、12行目の発話をほめだけではなく、ピンクの服を着るというSとYからの提案として理解していることも読み取れる。

このようなほめ返答の位置に現れるユーモアは下記の（4）にも見られる。

（4）【太鼓】 CallFriend_jpn_1724⁵

- 01 F： 。で。それは日本人の方が教えてください[の:?
02 M： [もちろん日本人です。
03 F： あ:: (0.4) そうですね、あのリズムっていうのは=
04 =特殊ですもの[ね:?
05 M： [ええ:: [あの-
→06 F： [わあ::じゃあ、あれですね、>なんか<特技が増え=
→07 =ちゃうわね、[だんだん。
08 M： [hhhhhhhhh
09 F： [hhhh
→10 M： [hhや、まあ:(なんな)下手のよこずなですよ [hhhh
11 F： [¥。あ。いや:¥h[hh
→12 M： [¥下手の横=
→13 =好きっていうことばあるけ[ど、¥
14 F： [¥ええ::よこずな¥hhhhh
→15 M： ¥(xxx変化xxx) 大変、
→16 (ただの)よこずなです。よ。¥hh

この事例は、アメリカに住んでいる友人同士の電話会話である。これまでの会話で、Mは最近、妻と一緒に和太鼓を始め、週1回の練習等で和太鼓を楽しんでいることを伝えた。01行目で、Fは「それは日本人の方が教えてください[の:?)と情報を求める。「もちろん日本人です」(02行目)という答えを得た後、Fはまず「あ」を長く伸ばして、新情報を受信できたことと知識状態の変化を示して（Heritage, 1984）から、「リズムっていうのは特殊ですものね」と日本人が教えていることに納得した理由、すなわち、自らの理解候補を提示する（03、04行目）。それに対して、Mは「ええ」と承認した直後、「あの」とさらに何かを発しようとしているが、Fの発話（06行目）に重なったため、発話を中断し発話順番をFに譲る。そこで、Fが発話順番を取り、まず「わあ」と驚きを表した直後、言葉を探しているように、「あの」「なんか」を伴いな

►5 （4）と2.2節で提示した谷畑（2020）による（2）とは同じ事例であるが、トランスクリプトには多少違いがある。また、谷畑（2020）では、ほめられた場合、ことわざの使用がどのようにほめを回避しうのかに注目したが、この事例におけることわざの変形使用（（2）の06行目）について詳細に分析していない。本稿では、このことわざの変形をユーモアとして捉えて分析する。

がら、「特技が増えちゃうわね,だんだん」(06、07行目)を発する。つまり、Fは、太鼓ができることを「特技」としてMに対するほめを行う。07行目の語尾にオーバーラップし、ほめられ側であるMは08行目で笑い始める。それは、06、07行目は自らに対するほめであることを理解したことを示すものとして認識可能である。その直後、ほめ側であるFも笑い始める(09行目)。

この時点で、前述したように、ほめられ側であるMは「ほめられ側のジレンマ」に直面する。さらに、このほめは、これまでMが自ら話した和太鼓に関する出来事に基づいたほめであるため、直接的に否定しにくいという課題も生じうる。ここで、Mはまず笑いを伴い、言葉を探しているように「や」、「まあ」と言い、ほめに対する明示的なスタンスを示せず、「下手のよこずなです」を発した後、続けて笑う(10行目)。谷畑(2020)が指摘したように、「下手のよこずな」という発話は、「下手の横好き」ということわざの中の「横好き」を「よこずな」に変えた変形である。

12、13行目で、Mは「下手の横好き」という元のことわざを知っていることを示す。おそらく15行目で、Mは、自分はなぜこのことわざを「下手のよこずな」に改変するのかについて説明していると考えられる(谷畑, 2020)が、この部分の音声をはっきりと聞き取れない。それに続いて、Mはさらなる「よこずな」を発する(16行目)。以上のように、Mは「下手の横好き」ということわざを知っていること、それにもかかわらず、10行目と16行目で2度の「よこずな」を発していることから、Mは意識的にことわざを改変して使っていることが読み取れる(谷畑, 2020)。

このように、Mは「横好き」と「よこずな」との発音の類似性を利用しつつ、ことわざをダジャレのリソースとして使用し、通常のほめ返答との間に「ズレ」を作ることで、ユーモアを生起させている。このユーモアは、ほめられた後、ほめ返答の位置に現れているから、ほめ返答の機能を果たしていると考えられる。なお、このユーモアを理解するためには、このことわざに対する知識が必要となる。つまり、このユーモアは、2人が持っているこのことわざについての共通知識に基づいたものである。さらに、このユーモアという行為によって、Mは、太鼓が下手なくせに、好きで熱心にやっているという意を伝え、暗示的にほめを否定している。その結果として、自ら言い出した太鼓に熱心にやっているという事実を否定せず、ほめを受け入れることで自画自賛になることを回避すると同時に、ほめへの明示的な否定をしないことでほめ側のPFに配慮することが可能になる。このことから、ほめ返答の位置に現れるこのユーモアは、「ほめられ側のジレンマ」に対処していることが分かる。

ことわざの変形によるユーモアを受けて、Fは、10行目の語尾の笑いにオーバーラップしながら、笑いを含む口調で「。あ。いや:」(11行目)を発している。また、13行目の語尾にオーバーラップしながら、Fは笑い(を含む口調)を伴いながら「え」を発した直後、「よこずな」を繰り返している(14行目)。Sacks(1974)、Norrick(1993)によれば、ユーモアに対して、笑いや具体的な面白みの繰り返しは、ユーモアへの理解を示すことができる。このことから、Fは11行目、14行目で10行目にあるユーモアを理解していることが分かる。

以上、日本語会話におけるほめ返答の位置でユーモアが現れる2つの事例

を提示したが、このようなユーモアは中国語会話でも観察される。以下に中国語の事例として、(5)、(6)を提示する。

(5)【スペアリブ】筆者収録

- 01 G: 哇, 好吃 哎, 这个 糖醋排骨, 厉害 呀,
ITJ おいしい ITJ この スペアリブの甘酢あんかけ すごい ITJ
- 02 小XXX.
Wちゃん
(うわ,おいしいね,このスペアリブの甘酢あんかけ,すごいね,Wちゃん.)
(Wに視線を向けながら発話している))
- 03 W: 瞎猫 碰上¥ 死 耗子¥.hhh
目の見えない猫 ぶつかる 死んだ ネズミ
(目の見えない猫が死んだネズミに出会う.)
(スペアリブに視線を向けてからGに視線を向ける))
- 04 G: ¥下次 还 能 碰上 不¥?hhh
今度 また できる ぶつかる か
(¥今度また会えるのかな?)
(Wに視線を向けながら発話している))

この事例は、恋人同士が自宅で食事をしている場面である。女性であるWははじめてスペアリブの甘酢あんかけを作ったが、Gはスペアリブの甘酢あんかけを食べた直後、Wに視線を向けながら、「うわ,おいしいね」、「すごいね」とほめを行う(01、02行目)。前述したように、この時点で、ほめられ側であるWは「ほめられ側のジレンマ」に直面する。

ここで、Wはスペアリブに視線を向けてから、Gに視線を向けながら、笑いを含む口調で03行目を発する。「目の見えない猫が死んだネズミに出会う」は中国語のことわざであり、まぐれ当たりであることを意味する。ほめられたという文脈において、Wはことわざを用い、自らを「目の見えない猫」に例え、スペアリブの料理を「死んだネズミ」に例え、さらに、自分と今回が美味しく作れたこととの関係性を、「目の見えない猫が死んだネズミに出会う」に例えている。このように、Wは今ここで起こった状況を揶揄する言葉遊びをしながら、自分は料理が上手なわけではなく、ただのまれなことであったことを伝えている。それと同時に、通常のほめ返答との間に「ズレ」を作ることで、ユーモアを生起させている。

このユーモア(03行目)は、ほめられた後、ほめ返答の産出が期待される位置に現れていることから、ほめ返答としてみなしてよいと考えられる。また、03行目を理解するためには、このことわざに対する知識が必要となる。つまり、03行目は2人の共通の背景知識に基づいたユーモアである。では、01、02行目のほめに対して、Wは「たまたま」「まぐれだよ」というような否定の返答ではなく、あえてユーモアを発することでどのような行為を達成しているのか。上述したように、このユーモアは、今回の料理はまぐれ当たりであったことを伝えることができるため、暗示的にほめを否定することができる。そ

の結果として、ほめを受け入れることによる自画自賛を回避すると同時に、ほめ側のPFに配慮することが可能になる。このことから、このユーモアは「ほめられ側のジレンマ」に対処可能であることが分かる。

03行目を受けて、GはWのほうに視線を向けながら、今度また料理を美味しく作ることができるのかと笑いを含む口調で確認を求める(04行目)。特に、「碰上(日本語訳:ぶつかる)」という03行目に出た言葉をリソースとして、また、「今度」という表現を用いていることから、Gは目の見えない猫の視点から発話し、Wの言葉遊びに付き合っていることが分かる。つまり、Gは04行でユーモアへの理解を示しながら(Sacks, 1974; Norrick, 1993)、ユーモアに同調している。

次に、(6)を見る。

(6)【天才】CallFriend_zho_5821

01 B: 哎呀, 你 要 GPA 保持 在 4.0 啊?
ITJ あなた 欲しい GPA 維持 ADP 4.0 INT
((あら,GPAは4.0を維持したいの?))

02 A: 对 呀.
そう ITJ
((そうよ。))

03 B: 哎呀, 没用 啊.
ITJ 役に立たない ITJ
((あら,役に立たないよ。))

04 A: 怎么 没用. 啊?
なんで 役に立たない INT
((なんで役に立たないの?))

05 B: xxx 有 什么 用 啊. 你 那么 好?
ある 何 用 ITJ あなた そんなに 優秀
((なんの役に立つの?あなたはそんなに優秀。))

06 A: 将来 一 找 工作, 哎哟赫, 高材生 啊.
将来 ADV 探す 仕事 ITJ 天才 ITJ
((将来,就職する時,あらら,天才だね。))

→07 B: 你 本来 就 是, 你 本来 就 是 高材生.
あなた 本来 ADV である あなた 本来 ADV である 天才
((あなたはそもそもそうだよ,あなたはそもそも天才だよ。))

→08 你 不用 你 也 能, 你 也 是 高材生.
あなた 要らない あなた ADV できる あなた ADV である 天才
(((GPA) がなくてもあなたはできる,あなたは天才だよ。))

→09 A: 哎哟赫, 身材 也 不高 呀.
ITJ 体型 ADV 高くない ITJ
((あれえ,背は高くないよ。))

10 B: hhhh哎, 你们 那儿 美国人 是不是 特 高 啊?
ITJ あなた達 ところ アメリカ人 であるかどうか とても 高い INT

((え,あなた達のところって、アメリカ人は背が高いだろう。))

この事例は中国語母語話者である友人同士の電話会話である。2人はどちらもアメリカに留学している。この事例は、Aは自らが履修した科目で高い点数を取れたことを話した後に続くやりとりである。Bは01行目でGPA（成績評価値）に言及し始め、「GPAは4.0を維持したい」から高い点数を取るようにしたのかとAに確認する。Aの返答を得た後に、Bは高いGPAが「役に立たない」（03、05行目）を発した直後、05行目の後半で「あなたはそんなに優秀」とAに対するほめとして認識可能な発話を発する。それに対して、Aは高いGPAを持つ人は、「天才（中国語：高才生）」であるように見えるため将来の就職に有利であるという意を表して返答する（06行目）。つまり、AはGPAの重要性を説明し、03行目と05行目の前半に対する反応を行ったが、05行目の後半部分であるほめに対してあえて返答を行っていないと考えられる。それを受けて、Bは「あなたはそもそもそうだよ、あなたはそもそも天才だよ」（07行目）、「（GPA）がなくてもあなたはできる、あなたは天才だよ」（08行目）とAをより明示的なほめを行う。さらに、表現上、「優秀」（05行目）から「天才」（07、08行目）への変更から、07、08行目は格上げされたほめであると言える。

ここで、06、07、08行目のいずれにも出てきた「天才（中国語：高才生）」という表現について説明する。「高才生」における「高」は「高い」、「才」は「才能」、「生」は「人」を意味する。つまり、「高才生」（読み方：gao cai sheng）とは、高い才能を持つ人を意味し、ここで「天才」に訳す。

前述のとおり、ほめられた後に、ほめられ側であるAは「ほめられ側のジレンマ」に直面している。この事例では、07、08行目のほめは、「高才生」というAが06行目ではじめて言及した表現をリソースとして利用しており、また、これまでAが伝えてきた自らが高い点数を取れたという事実はほめの根拠になりうる。そのため、このほめは直接的に否定しにくいという課題も生じる。ここで、Aは「あれえ、背は高くないよ」（「哎哟赫，身材也不高呀」）（09行目）と返答を行う。通常、「身材也不高呀（背は高くないよ）」という発話は、「背が高いね」のような体格を対象としたほめへの返答であり、「あなたは天才（高才生）だよ」というほめ（08行目）に対して、09行目は関係性のない返答であるように見える。実は、09行目は発音の類似性を用いた言葉遊びである。中国語では、「高才生」の「才」（読み方：cai、意味：才能）と、「体型」に対応する中国語「身材」の「材」（読み方：cai、意味：体つき）は同じ発音である。Aはこの発音の類似性を利用し、07、08行目にある「高才生」を「高い才能を持つ人」（天才）という本来の意味から、「身長が高い人」に置き換えた上で「背は高くない」というほめ返答を行う。つまり、Aは通常のほめ返答との間に「ズレ」を作ることで、ユーモアという行為を達成しているのである。

このように、この事例では、ほめられ側であるAは同音異義表現をダジャレのリソースとして利用し、ユーモアを醸し出している。このユーモアは、上記の他の3つの事例と同様にほめ返答の位置に出ていることから、ほめ返答の機能を果たしていると考えられる。また、09行目を理解するためには、

この同音異義表現に対する知識が必要となるため、09行目は2人の共通の背景知識に基づいたユーモアであると言える。さらに、このユーモアという行為によって、Aはほめの焦点をぼかすことで、ほめへの受け入れや否定等明確なスタンスの表明を避けることができる。その結果として、ほめを受け入れることにつながる自画自賛を避けると同時に、ほめを直接的に否定しないことで、ほめ側であるBのPFに配慮することが可能になる。このことから、ほめ返答の位置に現れるこのユーモアは、「ほめられ側のジレンマ」に対処可能であることが分かる。

09行目を受けて、Bは10行目でまず明らかな笑いを産出してから、「アメリカ人は背が高いだろう」と確認をする。前述の通り、ユーモアに対して、笑いの返答や具体的な面白みの繰り返しは、ユーモアへの理解を示すことができる (Sacks, 1974; Norrick, 1993)。10行目における笑い及び「身材也不高 (背は高くない)」(09行目) という表現に基づいた情報の確認から、Bは09行目にあるユーモアを理解していることが読み取れる。

以上、本節でほめ返答の位置でユーモアという行為が現れる事例を分析した。事例分析の結果、上記の4つの事例のいずれにおいても、ほめられた後、ほめ返答の生起が期待される位置に現れるユーモアはほめ返答として機能していること、また、その生起の仕方には多少違いがあるが、これらのユーモアは会話参与者間の共通知識に基づいたものであるという点で共通していることが分かった。さらに、このようなユーモアによって、ほめられ側は冗談めかしながら暗示的にほめを否定することができるため、ほめへの受け入れによる自画自賛を回避すると同時に、ほめ側のPFに配慮することが可能になることが分かった。つまり、ほめ返答の位置に現れるユーモアは、ほめの後にほめられ側が直面する「ほめられ側のジレンマ」に対処するという行為をも達成していると考えられる。

4 おわりに

以上、本稿では、ほめ返答の位置で現れたほめ返答ストラテジーに特化していないユーモアに注目し、日本語日常会話と中国語日常会話をデータとして用いて分析した。このようなユーモアがどのように実現されているのかについては、ほめられた後、「異常さ」のない返答との間に「ズレ」のある返答を行うことでユーモアが醸し出されることが、また、ユーモアは会話参与者間の共通知識に基づいて産出されることが分かった。このようなユーモアがどのような行為を達成しているのかについて分析した結果、ほめ返答の位置に現れるユーモアはほめ返答として機能していること、さらに、このようなユーモアによって、ほめられ側は冗談めかしながら暗示的にほめを否定することができることから、ほめられた後にほめられ側が直面する「ほめられ側のジレンマ」に対処するという行為を達成していることが分かった。

ただし、本稿では、ほめ返答の位置に現れた位置特定の行為としてユーモアについて分析したが、その後のほめ連鎖はどのように収束されるのかについては考察しなかった。また、ほめ返答に現れる他の特定の行為（例えば、自己卑下）もしばしば観察されるが、それについて分析することができなかった。以上の2点を今後の課題としたい。

参考文献

- Brown, Penelope., & Levinson, Stephen C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press. (田中典子監訳 (2011). ポライトネス 言語使用におけるある普遍現象 研究社.)
- Berger, Arthur Asa. (1976). Anatomy of the Joke. *Journal of Communication*, 26(3), 113-115.
- 千々岩広晃 (2013). 「からかい」の相互行為的達成―「あなたに関する知識」を用いた発話の一用法― 日本語・日本文化研究, 23, 129-141.
- Drew, Paul. (1987). Po-faced Receipts of Teases. *Linguistics*, 25, 219-253.
- 呉青青・松村瑞子 (2018). なぜ「からかい」として理解することが可能なのか―「じゃ」で始まる確認要求を用いた発話に着目して― 言語文化論究, 41, 17-31.
- 初鹿野阿れ・岩田夏穂 (2008). 選ばれていない参加者が発話するとき―もう一人の参加者について言及すること― 社会言語科学, 10 (2), 121-134.
- 初鹿野阿れ・岩田夏穂 (2014). 話の展開のやり方をターゲットとして「からかい」の分析 社会言語科学会第34回大会発表論文集, 34-37.
- 初鹿野阿れ・岩田夏穂 (2017). 「からかい」連鎖の構造と相互行為における環境 インタラクションと学習, 25-42.
- Hay, Jennifer. (2001). The Pragmatics of Humor Support. *Humor*, 14(1), 55-82.
- Herbert, Robert K. (1989). The Ethnography of English Compliment and Compliment Responses. In Oleksy, Wieslaw. (Ed.), *Contrastive Pragmatics*, 3-35. John Benjamins: Amsterdam/Philadelphia.
- Heritage, John. (1984). A Change-of-State Token and Aspects of its Sequential Placement. In Atkinson Maxwell J. & Heritage, John. (Eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, 299-345. Cambridge: Cambridge University Press.
- 平本毅 (2011). 「フリ」による「オチ」の投射：会話分析によるアプローチ フォーラム現代社会学, 10, 148-160.
- Holmes, J. (1988). Paying Compliments: A sex-preferential politeness strategy. *Journal of Pragmatics*, 12, 445-465.
- 今田恵美 (2015). 対人関係構築プロセスの会話分析 大阪大学出版会.
- 張承姫 (2014). 相互行為としてのほめとほめの返答―聞き手の焦点ずらしの応答に注目して― 社会言語科学, 17 (2), 98-113.
- Jefferson, J. (1979). A Technique for Inviting Laughter and its Subsequent Acceptance/Declination. In G, Psathas. (Eds.), *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, 70-96. New York: Irvington.
- Jefferson, J. (1984). On the Organization of Laughter in Talk about Troubles. In Atkinson, Maxwell J. and John Heritage. (Eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, 346-369. Cambridge: Cambridge University Press.
- 金庚芬 (2012). 日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究 ひつじ書房.
- 串田秀也 (2006). 相互行為秩序と会話分析―「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化― 世界思想社.
- Martin, R. A. (2007). *The psychology of humor*. MA: Elsevier Academic Press. (野村亮太・雨宮俊彦・丸野俊一監訳 (2011). ユーモア心理学ハンドブック 北大路書房)
- Norrick, Neal. (1993). *Conversational Joking: Humor in Everyday Talk*. Bloomington,

- Indianapolis: Indiana University Press.
- 大野敬代 (2005). ほめの意図と目上への応答について—シナリオ談話における待遇コミュニケーションとしての調査から— 社会言語科学, 7 (2), 88-96.
- 大津友美 (2007). 会話における冗談のコミュニケーション特徴—スタイルシフトによる冗談の場合— 社会言語科学, 10 (1), 45-55.
- 大津友美 (2004). 親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス—「遊び」としての対立行動に注目して— 社会言語科学, 6 (2), 44-53.
- Pomerantz, A. (1978). Compliment Responses: Notes on the Cooperation of Multiple Constraints. In Jim, Schenkein. (Ed.), *Studies in the Organization of Conversational Interaction*. 79-112. New York: Academic Press.
- Pomerantz, A. (1984). Agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of Preferred/Dispreferred Turn Shapes. In Atkinson, J. Maxwell, & Heritage, J. (Eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, 57-101. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sacks, H. (1974). An Analysis of the Course of a Joke's Telling in Conversation. In J. Sherzer. & R. Bauman. (Eds.), *Explorations in the Ethnography of Speaking*, 337-353. London: Cambridge University Press.
- Sacks, H. (1987). On the Preferences for Agreement and Contiguity in Sequences in Conversation. In Graham, Button, & John. R. E. Lee. (Eds.), *Talk and Social Organization*, 54-69. Multilingual Matters.
- Schegloff, E. A. (2007). *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis I*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, E. A., & Sacks, H. (1973). Opening up Closings. *Semiotica*, 8, 289-327. (北澤裕・西阪仰訳 (1995). 会話はどのように終了されるのか 日常性の解剖学: 知と会話, 175-241. マルジュ社.)
- 谷畑美咲 (2020). ことわざを用いたほめやデリケートな話題の回避—会話連鎖上の位置とはたらきの観点から— 言語コミュニケーション文化, 17 (1), 135-149.
- 寺尾留美 (1996). ほめ言葉への返答スタイル 日本語学, 15, 81-88.
- 上野行良 (1992). ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類化について 社会心理学研究, 7 (2), 112-120.
- Zajdman, Anat. (1995). Humorous Face-threatening Acts: Humor as Strategy. *Journal of Pragmatics*, 23, 325-339.

【付録1：トランスクリプト記号】

トランスクリプト記号は串田 (2006) を参照.

文字::	直前の音が伸びている	文字?	上昇調の抑揚
(.)	ごく短い沈黙	文字.	下降調の抑揚
(数字)	沈黙の秒数	文字-	直前の発話が中断されている
[	オーバーラップの開始位置	hh	笑い声
]	オーバーラップの終了位置	(())	分析者による注記
¥文字¥	笑っているような声の調子での発話	。文字。	弱く発話されている
→	分析において注目するほめ発話	文字	強く発話されている
➡	分析において注目する自己卑下発話	<文字>	ゆっくりと発話されている部分
=	前後の発話が切れ目なく続いている	>文字<	速く発話されている部分

【付録2：中国語クロス記号】

ITJ	interjection (間投助詞)	ADV	adverb (副詞)
INT	interrogative (疑問詞)	ADP	adposition (接置詞)